

ほくろと顔の魅力に関する信念とその知覚

伊藤 資浩
反田 智之
河原 純一郎

中京大学心理学部心理学科
福山大学人間文化学部心理学科
北海道大学大学院文学研究院

泣きぼくろが魅力を高めるという信念は、文化圏を問わず広く共有されている。本研究は、ほくろが顔の魅力の知覚に及ぼす影響を検討した。研究1では、ほくろが顔の魅力高めるとする信念の有無と魅力的なほくろの位置を回答させた。その結果、回答者の84%がほくろは魅力を高めるとし、その位置は外眼角近傍が最も多く、次いで口角近傍であった。研究2では、それらのほくろの有無を操作し、魅力評価を行ったが、ほくろによる魅力向上は認められなかった。研究3では、研究2の結果とメタ認知の整合性を検討した。その結果、研究2の結果と乖離があり、実際の知覚よりメタ認知で過大評価された。研究4・5では、観察者がほくろに気づいていない可能性を考慮し、ほくろの存在を顕在的に示したが、魅力に及ぼす影響は認められなかった。以上の結果から、一般的信念とは対照的に、顔の魅力評価におけるほくろの寄与は、主要な要因に比べて極めて小さいことが示された。

Keywords: facial mole, physical attractiveness, face perception, metacognition.

問題・目的

ほくろは英語では「Beauty spot」や「Beauty mark」と呼ばれることがあり、この観念は文化圏を問わず広く共有されている。ただし、ほくろが顔の魅力の知覚に及ぼす影響は一貫性がない。顔のさまざまな位置にほくろを配置した顔と、ほくろの無い顔の魅力度を比較したところ、ほくろの無い顔に比べて、ほくろの有る顔ではいずれも魅力度の評価は低かった (Springer et al., 2007)。一方で、「泣きぼくろの有る顔は魅力的」という教示を事前に与え、そのスキーマを活性化させた場合、ほくろ無しより泣きぼくろの有る顔で魅力は高かった (北神他, 2018)。

上述の研究の解釈を留保すべき点として、ほくろの無い顔の呈示頻度が低かった (12.5%) ため、それらは希少性が高いと捉えられた可能性がある (e.g., Janif et al., 2014)。また、泣きぼくろに関するスキーマのように、事前の教示が結果を不一致にさせている可能性がある。そこで、本研究では、魅力的に見えるほくろの位置を特定し (研究1)、その位置にあるほくろが顔の魅力の知覚に及ぼす影響について、ほくろの無い顔・有る顔を同数評価し、かつ、ほくろに関する事前の教示を操作した事態において、魅力評価を行った (研究2・4・5)。研究3では研究2の結果と、ほくろと魅力に関するメタ認知が一貫しているかを検討した。

研究1

研究1では、ほくろによって顔の魅力が高まるという信念がどの程度あるのか、そして、魅力的なほくろの位置を測定した。

方法

参加者 205名の学生が参加した。

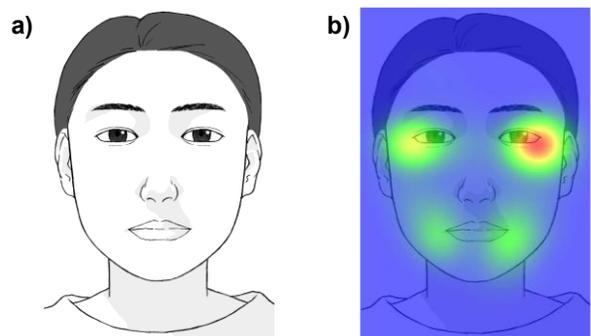
手続き 参加者は特定の位置にあるほくろが顔の魅力を高めるとするかを強制二肢選択法 (Yes/No) で回

答させた。Yesと回答した場合のみ、魅力的であると思うほくろの位置を標準的な女性顔の線画上 (Figure 1a) でプロットさせた。その際、複数回答が可能であったが、複数のほくろの組み合わせではなく、単独のほくろを前提として回答させた。

結果・考察

84% (172/205名) の参加者が、特定の位置にあるほくろは魅力的であるという信念を有していた。そのほくろの位置をプロットした結果をFigure 1bに示す。計282件の回答があり、左右の外眼角近傍、次いで口角近傍が魅力的であると評価された。

Figure 1
魅力的なほくろの位置のヒートマップ (研究1)



注) 本画像は権利上の理由により、元画像を基に作成した成人女性の線画である。

研究2

本研究では、外眼角と口角の近傍に有るほくろが顔の魅力の知覚に及ぼす影響について、ほくろの無い顔・有る顔を同数評価し、かつ、ほくろに関する事前の教示を与えない事態において、魅力評価を行った。

方法

参加者 新たに40名の学生が参加した。

刺激 独自の顔データベースをもとに、若年女性顔を低・中・高魅力群(各8枚)に分類した。元々あるほくろは除去し、左右それぞれの外眼角と口角の近傍にほくろのように見える点を画像編集ソフトで描画した。すなわち、各画像について、ほくろ無し顔1枚とほくろ有り顔4枚(左側の目元/口元, 右側の目元/口元)が用意された。

要因計画 ほくろ(無し, 目元, 口元)と元々の魅力(低, 中, 高)の2要因参加者内計画であった。顔画像ごとのほくろの有無と、左右の位置はランダム化された。

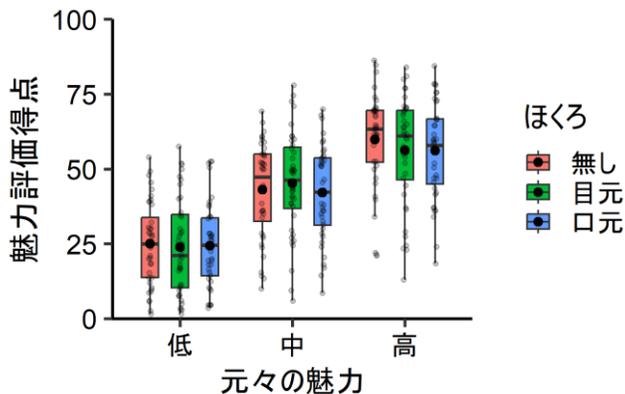
手続き 画面中央に表示される顔画像の見た目を1(非魅力的)から100(魅力的)で回答させた。

結果・考察

本研究結果をFigure 2に示す。要因計画に基づく分散分析の結果、ほくろの主効果($F(2, 78) = 1.10, p = .337, \eta_p^2 = .03$), および、交互作用($F(4, 156) = 1.18, p = .323, \eta_p^2 = .03$)は認められなかった。ほくろ有り無し顔画像の呈示頻度が均等、かつ、ほくろに関する教示がないために、ほくろに十分な注意が向かなかったと考えられる。この点について、スペースの都合上、詳細は割愛するが、男性顔での追試における事後質問では、ほくろに言及した参加者は約10%にとどまった。

Figure 2

ほくろと元々の魅力ごとの平均魅力得点(研究2)



研究3

研究3では研究2の結果と、ほくろと魅力に関するメタ認知が一貫しているかを検討した。

方法

参加者 新たに40名の学生が参加した。

手続き 参加者は顔にほくろ(目元または口元)が有る女性を想像し、その顔の魅力度がほくろ無し顔の魅力度と比べてどの程度であるか、1-100の範囲で回答した。具体的には、ほくろ無し顔の平均魅力得点(実験1の結果)が描画されたグラフが呈示され、参加者はその結果と比較する形で、各ほくろ有り顔の魅力得点を予想し、棒グラフを描画することで回答した。

結果・考察

得られた予測値から研究2のほくろ無し顔の平均得点を引いた差分をほくろ魅力効果として算出した。元々の魅力群の主効果があり($F(2, 78) = 10.76, p < .001$,

$\eta_p^2 = .22$), ほくろ魅力効果は元々の魅力の程度が高まるほど高かった。また、ほくろの位置の主効果があり($F(1, 39) = 9.40, p = .004, \eta_p^2 = .19$), 目元にほくろが有る顔は口元にほくろが有る顔より、ほくろ魅力効果が高かった。この結果は、研究1との整合性があり、特に目元にあるほくろ(泣きほくろ)が魅力を向上させるという信念が反映されたと考えられる。ただし、研究2とは乖離し、実際の知覚よりメタ認知でほくろの効果を過大評価することを示している。

研究4・5

研究2では、ほくろに注意が向いていなかった可能性があった。そこで、研究4・5では、ほくろの存在とほくろと魅力に関する一般的な信念について教示した事態において、魅力評価を行った。

方法

参加者 新たに各40名の学生が参加した。

刺激・要因計画・手続き 研究2の方法を踏襲した。ただし、評価の直前にほくろの存在を明かし、北神他(2018)を参考に、「ほくろのある顔は魅力的」という教示を行った。研究5では、ほくろの位置を目元に限定して追試を行った。

結果・考察

研究4 交互作用は認められなかったが($F(4, 156) = 0.59, p = .669, \eta_p^2 = .01$), ほくろの主効果(無し, 目元, 口元の比較)が認められた($F(2, 78) = 3.54, p = .034, \eta_p^2 = .08$)。しかし、多重比較において、 p 値を補正すると、いずれの条件間でも有意差は認められなかった($ps > .076, ds < 0.14$)。

研究5 ほくろの主効果(無しと目元の比較; $F(1, 39) = 0.26, p = .612, \eta_p^2 = .01$), および、交互作用は認められなかった($F(2, 78) = 2.14, p = .124, \eta_p^2 = .05$)。以上より、ほくろと魅力に関する事前の教示があっても、ほくろによる魅力の向上が一貫して認められなかった。

総合考察

本研究の一連の結果は、ほくろが顔の魅力を高めるという一般的信念が広く共有されている一方で、実際の顔の魅力評価への寄与は極めて限定的であることを示している。特に、ほくろの効果はメタ認知的予測では確認されたが、知覚的評価では再現されなかった。この結果は、高次の文化的信念やスキーマが視覚的重みづけに直接的な影響を及ぼすとは限らないことを示唆する。すなわち、魅力評価は主として顔全体の構造的特徴に依存し、ほくろのような微小な局所的特徴の影響は相対的に弱いことが明らかとなった。

参考文献

- Janif et al. (2014). *Biol. Lett.*, 10(4), 20130958. <https://doi.org/10.1098/rsbl.2013.0958>
- 北神他 (2018). 日本心理学会第 82 回大会, 558.
- Springer et al. (2007). *Ann. Plast. Surg.*, 59(2), 156-162. <https://doi.org/10.1097/01.sap.0000252041.66540.ec>